学校いじめ防止基本方針

堺市立東百舌鳥小学校

1. <いじめの定義>

「いじめ」とは、いじめられている児童と同じ学校に通う他の児童等がおこなう心理的・物理的な影響①を与える行為(インターネットを通じておこなわれるものを含む)で、いじめられている児童が心身の苦痛を感じている②ものをいう。

(1)「心理的・物理的な影響」とは、身体的な苦痛のほか、金品をたかられたり、物を隠されたり、嫌なことを無理やりさせられたりすることなどを意味する。

(2) 個々の行為が「いじめ」に当たるか否かの判断は、いじめられている児童の立場に立つことが必要。その上で背景にある事情の調査を行い、日常での観察、双方からの事情聴取をおこない、いじめに該当するか否かを判断するものとする。

◎いじめの定義の4つの要素

- ① 行為をした者(A)も行為の対象となった者(B)も児童生徒であること
- ② AとBの間に一定の人的関係が存在すること
- ③ AがBに対して心理的又は物理的な影響を与える行為をしたこと
- ④ 当該行為の対象となったBが心身の苦痛を感じていること

◎具体的ないじめの例

- ひやかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる
- 仲間はずれ、集団による無視をされる
- ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする
- 金品をたかられる
- 物を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする
- 嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする
- パソコンや携帯電話等で、誹謗中傷等の嫌なことをされる

2. <いじめ防止の取り組み>

いじめは「重大な人権侵害であり、絶対に許されないもの」であり、「どの子どもにも、どの学校にもおこりうるもの」「だれもが被害者にも加害者にもなりうるもの」。そのためにあえて被害者・加害者を発見するまでもなく、すべての児童生徒がいじめに巻き込まれる可能性があるものとして全員を対象に事前の働きかけ、すなわち未然防止の取組を行うことが、最も合理的で最も有効な対策になる。

◎授業改善にかかわる取り組み

- わかる授業づくりー全ての児童が参加でき、出番と活躍の場のある授業展開をすすめる。
- 生徒指導の観点からも公開授業をおこない、チームで個々の授業力をあげていく。
- 学校として全員が守るべき授業規律をつくり、教師の不適切な認識や言動、差別的な態度や言動をしないために、日頃からの研修や障害のある児童に対しての知識・認識・理解を深める。
- 障害のある児童、性同一性障害にかかる児童など配慮が必要な児童に対し、児童の特性をふまえた支援を行う。
- 教科の授業だけでなく、道徳・学活など全ての活動の中で「いじめ防止」を意識させ、考えさせる。そのために「いじめ対策年間計画」を立てたうえで、各々の指導計画をたてる。

◎児童の友人関係・集団づくり・社会性の育成を目的とする取り組み

- 定期的な教育相談・アンケートなどを実施し、実態の調査をおこなう。
アンケート結果については、データとして3年間保存する。
- 一人ひとりの児童がクラスの中に居場所を見つけ、学級の中でおこっていることに無関心であったり、いじめに面白半分で加わったりしないように、学級活動の中で個々の関係や役割を育てていく。

◎いじめに関する学習にかかわる取り組み

- 「いじめ・暴力防止プログラム」「SAFEプログラム研修」をおこない、自分を守るスキルやいじめを自制する態度を育てる。

◎児童会の取り組み

- いじめ防止の重要性を啓発し、児童会によるいじめ防止に向けた自主的取り組みをおこなう。

◎保護者・地域に対する啓発の取り組み

- PTAと連携し、携帯電話やインターネット利用に関する説明会・研修会を開催し、児童・保護者への情報モラルの啓発をすすめる。
- 年度当初から、学校通信や保護者会などで、いじめ問題に対する学校の認識や、対応方針・方法などを周知し、協力と情報提供等を依頼する。
- SSW 等と連携し生徒指導体制を整備してケース会議、カウンセリング技術の充実を図る。
- いじめ防止等の取組を学校評価の項目に位置付ける。
- 「いじめ」対策の組織的な計画・対応・評価のために校内に「いじめ対策委員会」を設置する。
委員会の構成は、校長(教頭)、生徒指導主事・生徒指導主任、学年主任、養護教諭担任、当該学年教員、必要に応じてSSW、SCとも連携を図る。
- いじめの指導についての記録をデータで保管して、次年度以降の指導に役立てる。

3. <いじめ対策年間計画>

月	学校行事	いじめ防止に関する取組		連携する外部機関 (市教委含)
4	始業式内科 検診身体 測定 教育相談 授業参観	いじめ対策委員会・職員会議 【いじめ対策の共通理解】 学年会 【被害者、加害者の関係等の指導記録 の引き継ぎ】	学級【学級開き・人間関係づくり・学級 のルールづくり】 児童会【年間・月間目標】 懇談会【保護者へのいじめ対策につ いての説明と啓発】	SSW
5	学年別 体育参観			
6	スポーツテスト 校外学習	いじめ対策委員会 【アンケートの分析・対策】	学級【いじめアンケート】① 3・4年【CAPプログラム】	委員会
7	個人懇談会	定例いじめ対策委員会 【いじめ対策の点検・評価】	生徒指導【非行防止教室】	警察署 PTA
8	夏季休業	研修 【人権・特別支援・生徒指導等に関する 研修会】		委員会
9	修学旅行 臨海学校			
10	学年別体育 参観		1・2年【SAFEプログラム】 学級【行事を通じた人間関係づくり】	委員会
11	校外学習 にんげん学習		5年【キャップハンディ】 学級【いじめアンケート】②	委員会
12	個人懇談会	人権週間【人権意識啓発活動】 いじめ対策委員会 【アンケートの分析・対策・ まとめ】 【いじめ対策の点検・評価】	学級【学校アンケート】	
1	茶の湯体験	研修【人権に関する研修会】		
2	支援お別れ会 参観授業	次年度提言会議いじめ対策委員会 【アンケートの分析・対策・ まとめ】 【いじめ対策の点検・評価】 学校評価【いじめ対策の点検】	学級【いじめアンケート】③	学校協議 委員
3	卒業式 修了式	学年会 【記録の整理、進級する学年への 引き継ぎ情報の作成】		

4. <早期発見・早期対応>

早期発見の重要性…重大な事案になる前にできるだけ早く「いじめ」を発見し、すみやかにとめることを最優先とする。

早期発見の基本

- ①児童のわずかな変化に気づく。気づいたことは必ず報告する。
- ②気づいた情報の共有「いじめ対策委員会」に報告・連絡・相談。メモをとり、記録をとっておく。
- ③(情報に基づき)すみやかに対応。

※特に発達障害を含む、障害のある児童に対しては、日常から特性を踏まえた支援を行い、保護者との連携を密にし、まわりの児童に対する必要な指導を心がける。

<いじめへの具体的な対応>

教職員が最初に「いじめ」を認知した場合

1. いじめの情報(気になる情報)のキャッチ→報告。独断で、解決を焦らない。
2. 「いじめ対策委員会」で対応方針の決定・役割分担
3. 事実関係の確認と支援・指導
4. いじめの被害者、加害者の保護者への指導と連携

(1) 被害者(いじめられた子ども)への対応

【基本的な姿勢】

- いかなる理由があっても、徹底していじめられた子どもの味方になる。
- 子どもの表面的な変化から解決したと判断せず、支援を継続する。

【事実の確認】

- 担任を中心に、子どもが話しやすい教師が対応する。
- いじめを受けた悔しさや、つらさにじっくりと耳を傾け、共感しながら事実を聞いていく。

【支援】

- 学校は、いじめをしている側を絶対に許さないことや、今後の指導の仕方について伝える。
- 自己肯定感の喪失を食い止めるよう、子どもの良さや優れているところを認め、励ます。
- いじめをしている側の子どもの今後の付き合い方など、これからの行動を具体的に指導する。
- 学校は安易に解決したと判断せず経過を見守ることを伝える。

【経過観察】

- 生活ノートの交換や面談等を定期的に行い、不安や悩みの解消に努める。
- 自己肯定感を回復できるよう、授業、学級活動等での活躍の場や、友人との関係づくりを支援する。

(2) 加害者(いじめをした子ども)への対応

【基本的な姿勢】

- なぜそのような行為をしたのかを確認し、自分はどうすべきだったか、これからどうしていくのかを内省させる。
- いじめを行った背景を理解しつつ、行った行為に対しては毅然と指導する。

【事実の確認】

- 対応する教師は中立の立場で事実確認を行う。(状況に応じて複数で行う)
- 話しやすい話題から入りながら、うそやごまかしのない事実確認を行う。

【指導】

- 被害者の辛さに気付かせ、自分が加害者であることの自覚をもたせる。
- いじめは決して許されないことをわからせ、責任転嫁等を許さない。
- いじめに至った自分の心情やグループ内等での立場を振り返らせるなどしながら、今後の行動の仕方について考えさせる。
- 不平不満、本人が満たされない気持ちなどをじっくり聴く。

【経過観察等】

- 生活ノートや面談などを通して、教師との交流を続けながら成長を確認していく。
- 授業や学級活動等を通して、エネルギーをプラスの行動に向かわせ、よさを認めていく。

(3) 傍観者への対応

【基本的な指導】

- いじめは、学級や学年等集団全体の問題として対応していく。
- いじめの問題に、教師が児童生徒とともに本気で取り組んでいる姿勢を示す。

【事実確認】

- いじめの事実を告げることは、「チクリ」などというものではないこと、辛い立場にある人を救うであり、人権と命を守る立派な行為であることを伝える。

【指導】

- 周囲ではやし立てていた者や傍観していた者も、問題の関係者として事実を受け止めさせる。
- 被害者は、観衆や傍観者の態度をどのように感じていたかを考えさせる。
- これからどのように行動したらよいのかを考えさせる。
- いじめの発生の誘引となった集団の行動規範や言葉遣いなどについて振り返らせる。
- いじめを許さない集団づくりに向けた話し合いを深める。

【経過観察等】

- 学級活動や学校行事等を通して、集団のエネルギーをプラスの方向に向けていく。
- いじめが解決したと思われる場合でも、十分な注意を怠らず、継続して指導を行っていく。

【保護者との連携】

(1) いじめられている子どもの保護者との連携

- ・事実が明らかになった時点で、速やかに家庭訪問を行い学校で把握した事実を正確に伝える。
- ・学校として徹底して子どもを守り、支援していくことを伝え、対応の方針を具体的に示す。
- ・対応経過をこまめに伝えるとともに、保護者からの子どもの様子等について情報提供を受ける。
- ・いじめの全貌がわかるまで、相手の保護者への連絡を避けることを依頼する。
- ・対応を安易に終結せず、経過を観察する方針を伝え、理解と協力を得る。

(2) いじめている子どもの保護者との連携

- ・事情聴取後、子どもを送り届けながら家庭を訪問し、事実を経過とともに伝え、その場で子どもに事実の確認をする。
- ・相手の子どもの状況も伝え、いじめの深刻さを認識してもらう。
- ・指導の経過と子どもの変容の様子等を伝え、指導に対する理解を求める。
- ・誰もが、いじめる側にも、いじめられる側にもなりうることを伝え、学校は事実について指導し、よりよく成長させたいと考えていることを伝える。
- ・事実を認めなかったり、私の子どもは首謀者ではないなどと、学校の対応を批判したりする保護者に対しては、改めて事実確認と学校の指導方針、教師の子どもの思う信念を示し、理解を求める。

(3) 保護者との日常的な連携

- ・年度当初から、通信や保護者会などで、いじめの問題に対する学校の認識や、対応方針や方法などを周知し、協力と情報提供等を依頼する。
- ・いじめや暴力の問題の発生時には、いじめられる側、いじめる側にどのような支援や指導を行うのか、対応の方針等を明らかにしておく。

(4) いじめの解消について

指導後次の確認ができた時に解消とし、それまでは継続的に指導を続ける。

- ・いじめに係る行為が止んでいる状態が少なくとも3か月間継続している。
- ・被害児童が心身の苦痛を感じていない。本人及び保護者に対し、面談等で確認。

5. <重大事態対応フロー図>

いじめの疑いに関する情報

年間3回(各学期に1回実施)のいじめアンケートの集計・分析・記録をいじめ対策委員会でおこない、いじめの疑いに関する情報を共有する。
担任の申し出により情報の共有。情報に基づき組織として対応を進める。

重大事態の発生 → 以下の場合、堺市教育委員会に報告

- 生命・身体・財産に重大な被害が生じた疑いのある時
 - 相当の期間学校を欠席することを余儀なくされている疑いのある時
 - 児童や保護者からいじめられて重大事態に至ったという申し立てがあった時
- その時点では事案が軽微と感じられても、聞き取り・事実確認などの調査に当たり 必要に応じて報告する。

堺市教育委員会が、重大事態の調査の主体を判断

学校が調査主体となる場合

- 学校のもとに、重大事態の調査組織を設置
重大事態の性質に応じて、適切な専門家を加える
- 調査組織で事実関係を明確にするための調査を実施
客観的な事実関係を速やかに調査する
これまでに、学校で調査した場合も資料の再分析や必要に応じた新たな調査を実施
 - いじめを受けた児童・保護者に対して情報を適切に提供 個人情報に
十分に配慮した上で、情報を適切に提供
- 調査結果を堺市教育委員会に報告
- 調査結果を踏まえた必要な措置

堺市教育委員会が調査主体となる場合

委員会の指示のもと、資料の提出など、調査に協力

6. <関係機関との連携>

- ・深刻ないじめの解決には、教育委員会、警察、児童相談所、医療機関等の連携が不可欠である。
- ・日頃からの連携が、深刻な事案が発生した時の連携プレーを容易にする。
- ・小中連携を通じて、中学校と指導方法について連絡しあう。

<連携を必要とする状況と対応する関係機関>

- いじめの発見状況を報告する。→堺市教育委員会
- 対応方針について相談したい。→堺市教育委員会
- 指導方針や解決方法について相談したい。→堺市教育委員会
- 子どもや保護者への対応方法を相談したい。→堺市教育委員会
- いじめによる暴行・傷害事件、恐喝等の刑事事件が発生している。→子ども相談所、警察
- いじめられた子どもが外傷や心的外傷を負っている。→SSW・医療機関
- いじめられた子ども、いじめた子どもの心のケアが必要である。→子ども相談所

子ども電話教育相談「こころホーン」(24時間対応) 072-270-5561
ソフィア教育相談 072-270-8121